

## 萬葉集七夕歌について

中 西 進

上古に於て人々が持つていた説話は種々あつたであらうが、我々はその口誦の型をそのまま知る事は出来ない。説話が作品化されたものは、移植、導入、或は改竄を終っているものであらうが、唯一の方法として仮にこれらを説話の代弁者とするならば、ある程度の手がかりをうる事は可能である。

こうして説話を主題とする作品は、説話としての面と作品としての面と双方の考究が必要とされるが、又同時に説話の一つの信仰にもなり、広般な人心に支えられているものなので、成立条件としての考え方、説話を持囃した気持等も考えられねばならない。

七夕をめぐる上代の作品についても、このような事が考えられる。七夕伝説そのものについて、その作品としての分析について、そして、それを支える心について、こうした三つが相補し合つて全きをうるようである。かかる態度に基いて以下万葉集の七夕歌を中心として考えていきたいと思う。

七夕伝説は中国の伝説である事は云う迄もないが、その根源は既にすぐれた先説をもつ。即ち出石誠彦氏は「天漢」なる語は漢水から発したものとされ「支那上代思想史研究」、小島慶之氏は漢水のほとりに行われた伝説の天上移行を考えられる。そして毛詩の

南有喬木 不可休息 漢有游女 不可求思 漢之廣矣

不可泳思 江之永矣 不可方思 國風 漢廣

をその民謡に擬えられている 万葉集大成「作 家研究篇上」 これは紀神代下に見える木花開耶姬妻寛ぎの条に一書として記されている、

後遊幸海浜見一美人

と著しく似通つた感じをもつ。国風は民謡であり、民衆のもつていた恋歌であるが、川を対象とした恋で、河漢と恋との結合は第一にここに現われていると考えるのは妥当である。紀の記事は少し内容を異にするが、暫く措こう。この恋物語が、天星伝説に移行したと考えるのである。

この推移の中に參商二星の物語左が結合されて定着した伝説になるが、現今、琴座の星である織女星は星としてこれ以前からも認められていたと思われ、

天河之東星有微微在氏之天下謂之織女遊仙窟所引 焦林大斗

とあり又

天女孫同右 史記

天之真女同右 漢書 裴文志

と云われ、他民族の思考過程と等しく星に附会した神話とその名称であつたものようである。これが漢水上の恋物語の天上推移の裡に求められて結合したと考えるべきかと思う。

劉宋宗懷の荆礎歲時記本一には

天河之東有織女天帝之子也年々織杼勞役織成雲錦天衣天帝憐其独処許嫁河西牽牛即嫁後遂廢織經天帝怒責令歸河

東但使其一年一度相會

と見られる。これはその由来を語るものであるが、作品化の上直接姿を現わす伝誦の内容は一例を文選にとれば洛神賦に

歎匏瓜之無匹詠牽牛之独処

と見え、李喜注は

天宮星占曰匏瓜一名天鵝在河鼓東牽牛一名天鼓不與織女值者陰陽不和曹植九詠注曰牽牛為夫織女為婦織女牽牛之星各処河鼓之旁七月七日乃得一會阮瑀止慾賦曰傷匏瓜之無偶悲織女之独勤

とある。洛神賦の万葉集への影響は著しい。

こうした伝説を作品化する事は何時頃から行われたであろうか。その正確な時代を得る事は出来ぬが、作品として漢の古詩中に現われるものが初見である。

迢迢牽牛星 皎皎河漢女 織織擢素手 札札弄機杼

終日不成章 泣涕零如雨 河漢清且淺 相去復幾許

盈盈一水間 脈脈不得語

これは文選卷十古詩十九首中、第十首に載せられているが、玉台新詠集卷一にも

枚乘雜詩九首

としてその第八首にとられている。枚乘は漢初第七代武帝朝初めの歿である為、玉台新詠集を信ずると既に武帝の頃以来こうした物語の作品化され来つた事が知られる。ほぼ西暦紀元の創始、我国建国の頃と等しい時代である。文選にはこの他、これに和した陸機の「擬古詩」十二首が同巻にあり、玉台新詠集卷三に七首とられた内の第四首がそれである。謝惠連には「雜詩三首」が玉台新詠集卷三に見え、内「七月七日詠牛女」と題されたものは文選卷五に同じ題で収められている。玉台新詠集には、この他劉鑠の「雜詩五首」に「詠牛女」と一首見え、王鑒に「七月觀織女一首」と見えるが、王鑒のものは二星伝説に寄托した情詩であり常識化に迄進んでいた事を示すものである。又顏延之の「為織女贈牽牛」はその立場に擬え立つての作として万葉集に多く見られる同型の発想が注

目されるが、徐悱〔妻劉氏本注〕の「答唐孃七夕所穿針」は既にかかる風習をもつていた事を物語るものとして考えられる。

又楽府の万葉集との関係は濃いものがあるが、内第三類のものに七夕との関係をもつものが多い。

吾隱有楫棹無而渡守舟將借八方須叟者有待那珂灘第四曲

聞歛下楊州相送江津灣願得篙櫓折交即到頭還同第四曲

篙折当更覓櫓折当更安各自是官人那得到頭還同第五曲

これらは短歌の内容とも相関連するものとして貴重であるが、他清商曲辭、又子夜歌四時歌等類似があり、漢を初めとして南朝楽府のこの種のは七夕伝説を語るのみならぬ重大な意味をもっている。

下つて初唐には万葉集にその名に見える遊仙窟を見ると、

欲語時媚子開醫疑織女留星去

十娘廻頭笑曰星留織女遂処人間

下官詠曰人去悠悠隔隔而天未審迢迢度幾年

等があり、他にも古典を引き故事を用いるが、これらと交つて七夕が親しまれていた事を示している。張文成はほぼ高宗から玄宗の間で、我が国の万葉第二期に相当するが、憶良や家持は殆ど同時代人としての文成の作品の影響をうけた事になる。こうした関係と共に、万葉集に七夕宴の最初の作が憶良に現われている事も考え合せられるのである。

### 三

中国に於て、伝説はかかる姿をとり、それを上代人は受入れたのであるが、万葉集の作品を見ると、その歌は次の如くである。

人麿歌集卷一 三八首

憶良卷八 二一首

湯原王卷八 二一首

市原王卷八 一一首

家持卷一七 一三首

間人宿禰卷九 二二首

遣新羅使卷一 四首

房前ノ宅ノ歌卷九 二二首

作者未詳 六〇首

内、「泉河辺間人宿禰作歌二首一六八は一七〇九の左註に「右柿本朝臣人麿之歌集所出」とあり、この「右」は、何れの歌以後とも定かではないが、一六六七以後かともいわれ、又一六八二以後は確實とされているので、人麿歌集に一括する事が出来る。次の遣新羅使の歌というのは

七夕歌一首三六一

七夕仰觀天漢各陳所思作歌三首三六五

であるが、前者は左注に「右柿本朝臣人麿歌」とある。この

歌は他に見当らず、或は人麿歌集中に含まれた人麿の作を誦したものかもしれない。後者は「右一首大使」と三六五六に左注があり、阿倍継麻呂である事がわかるが、他の二首は不明である。又房前宅の歌というのは「七夕歌一首并短歌」一七六であるが、左註に五―四

右件歌或云中衛大将藤原北卿宅作也

とあり、「考」は家持とし「代匠記」は詞句の憶良に似ている事をいつている。

こうして右の七夕歌は、かなり作者を単純にしている。即ち前表は

(一) 人麿及びその周辺

四一首

人麿一首人麿歌集

四〇首

(二) 憶良及びそれ以後

三三首

憶良一二首湯原王二首市原王一首家持一三首憶良  
或は家持二首阿倍継麻呂一首遣新羅使某二首

(三) 作者未詳

六〇首

の如く書き改める事が出来る。人麿を中心とする歌群と、憶良家持を中心とする歌群とになり、未詳のものを除くと極めて限られた人々の作となるのである。

又これらの作品の年代を考えて見ると、人麿歌集のものの中に

此歌一首庚辰年作之三三〇

と左註があり、人麿歌集を人麿から離さずに考えると書紀紀

年の天武九年の作で、この辺りに一群の歌が考えられる。そして憶良の歌は夫々左註に

右養老八年七月七日応令一八

右神龜元年七月七日夜左大臣家一九

右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河一云 〇―一二

右天平二年七月八日夜帥家集會三一六

と見える。養老八年は二月神龜改元であり、又憶良は同五年侍東宮の為、誤りを「考」は七年、「代匠記」は六年と訂正する。又先に挙げた房前宅の歌を憶良の作とすると、彼はほぼ天平三年十二月上京し五年六月卒している為、天平四年の作とする事が出来る。房前の中衛大将は公卿補任の記録によると天平二年から同六年に亘つてである。又家持のものは集の排列によつて夫々天平十年三九、勝宝元年四一二、同二年六一、同六年一三三である。両王のものは不明であるが、ほぼ天平のもので、こうして、憶良以後のものは神龜天平を中心とする事が知られる。遣新羅使も統紀によると天平八、九年朝。九年正月入京で、七夕歌は八年のそれである。即ち万葉集の七夕歌は天武九年周辺の人麿を中心とする歌群と、天平を中心として勝宝に及ぶ憶良家持らの歌群とであると云う事が出来るようである。

#### 四

こうして万葉集の七夕歌が大体二種に區別して考えられる

が、それは如何なる様子であろうか。次に作品の内容について考えてみると、これらは夫々に強い漢文学の影響をもち、その点の差違はない。漢文学の影響は万葉集全般の問題であり、その上に主題上殊に添加された影響をもつているが、広く七夕作品を見てみると、全く模倣のものもある。漢詩に於ける典拠は既に数多く説かれてはいるが、先に挙げた、玉台新詠集に枚乗作とする漢古詩「迢迢牽牛星 皎皎河漢女」に等しい。

皎々河東女

迢迢漢西牛

という句をもつ五言八詩が正倉院造物所作物帳の落書にある。然しこの場合に、この落書が枚乗の作を模したとするのは正しくなく、「皎々」「迢迢」という語は七夕詩に慣用される語であり、所謂「和」詩の場合には意識的に用いられているので、それら多くの七夕詩を見て上代人の書いた落書である。だが懐風藻を見ると、集全体が殆ど模倣である中にある、七夕詩も同様で三方の

金漢星榆冷 銀河月桂秋 仙駕度潢流

は

漢曲天榆冷 河辺月桂秋 飄飄渡淺流隋江總  
七夕詩

を典拠としている。三方の懐風藻の他の作品も全く模倣であるのと同様である。又百済和磨についてはその作の

愁心燭處煎 昔惜河難越 今傷漢易旋

の三句は

蘭膏依曉煎 昔悲漢難越 今傷河易旋

梁武帝七夕(玉台新詠集卷七)

を基としてその数語を同意語で置き換えたものにすぎない。

懐風藻の作品はかく、模倣をもつているが、文雅として漢詩を作る上に原典を披攬する事は不可欠の要素であつたかも知れない。そうした漢詩が数多く作られるのが、先の分類によると第二群の歌の旁らに置いてであるのは大きな意味をもつているが、漢詩から和歌に目を転じていくと、全くの模倣というものは両群から共々に姿を消す。

七夕に於ては「仙車」「鳳駕」といつた類の語が頻出する

が、

仙車渡鵲橋 神駕越清流 吉智首

鳳駕飛雲路 龍車越漢流 総前

と作られるこれらは

仙車駐七襄 鳳駕出天潢 何遜 詠七夕

龍駕凌霄登 劉鏤 詠牛女

紫煙凌鳳羽 簡文 七夕

の如き作品と物語を承けて作られるのである。七夕詩の輸入によつて醸成される宮廷中心の七夕伝説観を最も明瞭に表わしているが、こうした漢詩の通例に反して、和歌では悉く「車」が「舟」になつてゐる。

天漢安の渡りに船浮けて秋立つ待つと妹につげこそ

二〇〇〇  
人麿歌集

久方の漢の瀬に船浮けて今夜か君が我許来まさむ  
憶良 一一五

青波に袖さへ濡れて漕ぐ船のかし振る程にさ夜ふけなむ  
か 四三二三  
家持

天の海に雲の波立ち月の船星の林にこぎ隠る見ゆ  
人麿 歌集 六一〇

の如き「月舟」となつて現われる。この語について柿村重松氏は模案熟語とされ「上代日本書紀」に「月舟」として書紀、風土記らの記述を挙げておられる。神と舟との結合について、例えば吉野の三船山に於ても同様であらうと私かに考えられ、すぐれた説と見る事が出来るが、その月との結合については、又こゝも考えられるように思う。楚辞九歌第二、湘君に、

桂櫂兮蘭枻 斲冰兮積雪

と見える例があり、「月桂」という語は懷風藻、万葉集両書に互つて枚挙に遑ない。「攀桂」という熟語になつて現われるのはその転化で更に徹底した様を示すものであらう。ところが懷風藻には文武天皇の「詠月」に

月舟移霧渚 楓楫泛霞浜

と見られる。この句が他の懷風藻作品と同じように対である為の条件は月〓楓、舟〓楫である。こうした考えがなければ

この詩は成立たない。楓、桂は和名抄によると夫々

楓 兼名苑云楓一名攝風撰二音和名乎加豆良爾雅云有脂而香謂之楓

桂 兼名苑云桂一名稜計後二音和名女加豆良

とあり、同じものである事は云う迄もない。即ち月桂の櫂を想定した事に於て楚辞は月舟の先蹤をなすものであり、桂櫂を逆に応用すると月舟になる。七夕の場合には天漢であり、既に海を月舟が渡るとすれば星が舟に乗つて川を渡る事は当然の着想だというるかもしれない。そうしてこれらの変化は極めて徐々に行われたであらう。漢詩に於てそのままの踏襲を行つたのに対し、和歌に於てはこうした変化が齎らされている。

同様の变化は他にもあり、何仲誼に

歴歴金星疑旋珮 冉冉雲衣似曳羅七夕賦詠成篇詩

と見える。「雲衣」は

斂淚開星罍 微步動雲衣杜審言奉和七夕侍宴

誰催巧笑開星罍 不惜呈露解雲衣許敬宗七夕賦成篇詩

等多くの用例を見るが、万葉集に於ては織女との関連に

天漢霧立ち上るたなばたの雲の衣の飄る袖かも二〇六三

秋風の吹きただよはす白雲は織女の天つ領巾かも二〇四一

と翻案されている。

又用字の面についても漢文学との交渉は見られ

天漢水陰草の金風に靡かふ見れば時は来にけり二〇一三

の「金風」は文選<sup>卷十</sup>の張景陽の

金風扇素節舟霧啓陰期<sup>雜詩十首ノ三</sup>

に見える字であり、憶良の

風雲は二つの岸に通へども吾が遠婦の言ぞ通はぬ<sup>三一五</sup>

「風雲」は家持にも同様用いられ音信という漢文学の意義に基いている。云う迄もないが、例えば陸士衡の擬明月皎夜光の

招揺西北指天漢東南傾<sup>文選雜擬古詩十二首ノ十二</sup>

に見られ用例の多い<sup>魯都賦等</sup>「天漢」は天の河として人麿歌集にも憶良の歌にも見られる用字である。

こうして語句については漢詩には著しい模倣があるが、和歌にはごく根本的な知識となる語「天漢」といつたものはそのまま二群何れにも用いられているが、物語内容として織女の想像する衣とか牽牛の乗るべき物は変化した形を見せており、これも二群何れにも共通である。この事と同時に憶良・家持に単なる文字でなく思想背景をもつた用字が現われ、又これらの傍らに著しい模倣をもつ漢詩が三方や繪前によつて作られているという事實は、人麿を遙かに先立つ時代に固定した伝説内容が出来上つており、その流れが和歌にあり乍ら、一方新しい中国詩の輸入を得て、そこに源をもつ漢詩が作られ始めた事を物語っている。第二群の作品はその後の交に出来上つていると見られるのである。

## 五

又伝説の考え方について作品を辿ると、その点に於ても中国詩と類似の発想をもつものがある。既に小島氏にすぐれた考察がなされているが、一例を示すと

秋されば河ぞ霧らへる天の川河に向ひ居て恋ふる夜多し

二〇〇

は

盈盈一水辺 夜夜空自憐<sup>范雲望織女詩</sup>

盈盈河水側 朝朝長嘆息<sup>刑部七夕詩</sup>

と見え

年の恋今夜尽して明日よりは常の如くや吾が恋ひ居らむ

三〇

という一夜のみの歡情を嘆くものは

歡逐今宵尽 愁隨還路歸<sup>王粲七夕詩</sup>

年年今夜尽 機杼別情多<sup>杜審言七夕詩</sup>

と見えている。一年に一度という感情は

一年銜別怨<sup>杜審言奉和七夕宴兩儀殿應制詔詩</sup>

一年抱怨嗟長別<sup>許敬宗七夕賦詠成篇詩</sup>

の如く表われているが、前掲歌の他

一年に七夕のみ相ふ人の恋も<sup>二二〇</sup>

織女の今夜相ひなば常の如明日を阻て、年は長けむ<sup>二〇〇</sup>

と歌われている。

これらは無論、擬え挙げた詩から和歌が影響されたり、中国詩を摸倣したものではない。自然の人間性が同じ伝説に向つてとる、偶然に一致する発想であるに他ならないが、それは又何の不自然さも感じさせぬ程に、この伝説が人々の間に融け込んでいた事を語るのに他ならない。紐の解ける事、解く事に恋を集約して考える古代風習を七夕伝説の中に考え、歌うものすらある。

天漢相向き立ちて吾が恋ひし君来ますなり紐解き設けな

一一五

あき風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月かたぶき

ぬ 四三  
一一一

その敍法に伝統的な描写をもつて当っているものがある。

乾坤の初の時ゆ天漢に向ひて居りて 八九〇

八千戈の神の御世より 二〇〇

天地と別れし時ゆ久方の天つ験と定めてし天の河原に 二〇〇

九二〇

こうして早くから定着して伝え来つた様子を七夕歌に見る事が出来るが、然しその考え方や扱ひ方に於て二群間にかなりな変化をもつ事も事実のようである。人麿周辺のものとは伝説そのものの興味より、伝説に対する抒情であり、こうした恋物語をこく身近かなものとして考えていた。先に述べた漢詩が美しい車の「飛」び「越」えゆくのに対して、彼らの考

えた二星は

蒼天ゆ往来ふ吾等すら汝が故に天漢道をなづみてぞ来し 二〇〇

天漢湍瀬に白浪高けどもたゞ渡り来ぬ待たば苦しみ 八二五

と苦しみを重ねて逢つている。かかる庶民的な親近感が無名の七夕歌をこれ程生み出した原因になつていたのであろう。

吾が待ちし秋は来りぬ妹と吾何事あれぞ紐解かさらむ 三三六

吾等が恋ふる丹のほの面今夕もか天漢原に石枕巻く 二〇三

という「吾(等)」は伝説を自らの上に感じて歌うのであるが、中国詩にも

為織女贈牽牛詩 沈約

代牽牛答織女詩 王筠

等とられている態度で同じ過程をもつ心理と思われるが、然しこれらは右の和歌に見られるような痛切な響きはもつていない。試みにそうした詩を作つてみるのであり、根本的に異つたものである。「吾」の発想をとるものは憶良らにも無論あるが、その違いも又これと同様なのである。通う者は伝説に於ては織女であつたのに、和歌のそれは彗星である。次の如く

天漢棚橋渡せ織女はい渡らさむに棚橋渡せ 二〇〇

と織女の通うものと共に 八一

秋風の清き夕に天漢舟榜ぎ度る月人壯子 四二〇

二〇〇

四二〇



と多くの歌が彥星にしているのは、原型を留め乍らも民俗として機械して男神をまつという風習を承け、又自らの恋愛生活に基づいて伝説を再生産するのである。自らの風習、生活に基いた抒情である事を物語るのである。此等に、天上の星の恋物語といった夢幻的要素は些かも感じられないのである。

これに対し憶良の歌を見ると、その十二首は一首一八は応制歌であり、一首一九は懷風藻の例に準じて恐らく長屋王下の詩宴の題詠であろうし、次の三首〇一―〇二は左註の「一云帥家作」を活かせば次の四首三一―三六と共に同様宴のものである。これらは漢文学の影響下に発達した制作の場で、外形としてこうした出発をしているが、又長歌は事件的興味を中心としたもので虫麿の伝説歌にも交えうるものである。第一群のものが生活に立脚したものであつたのと好対をなすが、表現法にも

青浪に望は絶えぬ 白雲に詠は尽きぬ

という対を用いている。この対は懷風藻に百済和麿が

青海千里外 白雲一相思

と用い、万葉集にも吉田宜の書状に

碧海分地 白雲隔天

と見え、又中国詩にも杜審言の七夕詩に

白露含明月 青雲斷絳河

と歌われている。この詩は対の他に天漢に青雲を考える点で

も共通しているが、家持の七夕歌にも

青波に袖さへぬれて四三

と承けつがれている。更に一五二六に用いられている

王蜻蜒髣髴所見而別去者四三

「髣髴」は文選の海賦、西京賦らに用いられている言葉である。

家持の十三首についても「豫作七夕歌一首」四一と、「仰

(見)天漢」作り四二二五―七。「聯述懷」べた三九〇〇もの

で、憶良の立場と全く等しく、又長歌が事件的興味を中心を

置いている事も変りない。湯原市原而王のものも同曲のもの

と見てよく、湯原王の

牽牛の念ひ坐すらむ情ゆも見る吾辛苦し夜の更降ぬれば四四

は殆ど寄物陳思の発想に近く

織女の袖続ぐ三更の五更は河瀬の鶴は鳴かずともよし四五

は技巧を凝らしたもので、又市原王の

妹許と吾が去く道の河しあれば附目緘結跡夜ぞ更降ちけ四五

も題詠の作として誤りはないであろう。遣新羅使のものもや

はり「仰觀天漢各陳所思作歌」で等しい立場だが、たゞ房前

宅の歌とされた長歌は所謂八句の律詩体長歌であるが、古風

を存し、左註の「或云」を疑わねばならぬかもしれない。

こうして、作品らの支え方は、海の彼此をとわず、同様な心理で伝説に対する程に風土化した伝説によつてゐるが、二群の間に於ては生活の中に歌う事と、情趣として歌う事との大きな距りを見せるのである。

## 六

万葉集の七夕歌はこうした二群をもつ。それは如何なる故であろうか。七夕伝説は物語と同時に祭事が行われるわけであるが、その星祭の初まる時期は夙くは漢から、六朝中期にかけて、一世紀から三世紀の時代に比定されると橋川時雄氏は云われている。我国と大陸の交渉の初めは後漢書東夷伝に建武中元二年倭奴国奉貢朝賀と見え更に

安帝永初元年倭国王帥竹等献生口百六十人

と見える。前者は光武帝朝で五七年、後者は一〇七年に当るが、正確に交渉が文化面で行われるのはもつと後である。その中でこの伝説も当然將來した事が考えられるが、書紀を繙く時に現われる交渉は実用文化の吸収が殆どで、織物の技術と共に來つた例えば「縫衣造」らの附隨させたものと思われる。機織の渡來、招聘は紀に夥しいが、魏書東夷伝には

作衣如单被穿其中央貫頭衣之

と古代衣裳を示して、それをこうした技術によつて急速に進歩させる必要があつた。秦人の將來した織物面に七夕の

意匠のある事は注目すべき事であり、素材にして不可欠な産業である機織と織女星という名称との関連も重要な事である。

こうして七夕伝説は我が国に伝えられた。これは確かな事実であるが、然しここで問題になるのは不可欠な原始産業であればこそ当然古くから我国に機織の行われた事であり、既にあげた紀一書の記事の如くそれが神性との関連を仄めかしている事である。紀記には神代に遡つて機織の記事は多いが、その中に

天なるや弟機織女のうながせる玉のみすまるみすまるに  
穴玉はやみ谷二わたらず阿治志貴高比日根の神ぞや

の一首を見る。今記卷上によつて記したが、紀卷二にも歌卷一標式雑体有十五長歌にも多少異同を見せて載せられている。又紀代上卷一には天照大神が神衣を織る記事も見え、更に折口信夫氏は水辺に沐浴し機織して神を待つという古來の民俗を述べられてゐる。

古代研究民俗学篇・その他が、事実としてあつたとすると、漢水地方のその如く、機織に天上性と水性が同様考えられるので、民間伝誦として受入れたものは予め耕された土地に播かれた事になる。あく迄も素地としてのそれであつて、伝説そのものを古來のものと混同する事は出来ぬが、こうした風土の中に渡來し、民間に行われ來つた伝説は多少ずつ本来の内容を馴化させて我国に定住したが、それを基にしたものが第一群の人麿周辺の作であろう。生活に導入した歌い方は

たやすい風土馴化の故に可能であつたようである。

又曲水宴の如く一般庶民と全く關係のないものは逸早く宮中の風雅として取上げられるが、民間の素朴な祭事が風雅として取上げられる為には大きな割期と長い時間が必要である。その割期になつてゐるのは唐朝に於ける孔針宴の風習であらう。万事大陸風に模した宮中で七夕宴を文雅の宴とする為には孔針の風習を知つてからの遽さがあつた。そしてその時には七夕伝説渡来以後かなりな時代を経ていたのである。統紀によると天平六年に

七月丙寅：是夕徙御南苑命文人賦七夕之詩

と見えるのが七夕宴の初見で、公事根源によると勝宝七年に初まる。懷風藻には史の七夕詩があるが、史の歿年は養老四年で、之を詩宴のものとすると最も早いものである。こうした年代の重なるどころと、憶良の作の年代とは一致する。この宴を中心とした宮廷風俗の中に生れるのが憶良以下の第二群の作である。これら史書の七夕宴の記事と、先に見た作の制作の場とは、宴を取巻く歌群である事を証明する以外のものではない。

## 七

万葉集の七夕歌はこうして中国本土に育つた伝説を生活の共通面に受けて、帰化縫女群の生活を通して庶民的に拡がつたものと、改めて孔針の行事を加えて公的な宴遊行事の一部

として持囃されたものとの二種類に區別されるが、前者は人麿及びその周辺の歌群で後者は憶良及びそれ以後天平年間を中心とする歌群である。又夫々の態度も異り、前者は皆等しく自らの姿として伝説を想う、生活感情の移入された悲恋への関心であつたが、後者は廻り来る七夕の夜毎に題詠的に文雅として、七夕伝説そのものの興味に詠じたものであつた。そしてこれらが共通して、伝説のもつてゐる筈の神秘性を、遊仙痛らと違つて些も受取つていないのは、他の神仙譚が上層階級の知識として導入されたのに対して、全く経路を異にしている為であらう。(五五—一〇)

竹内金治郎 著

萬葉集 新講

A5判 三五〇頁  
定価 三三〇円

森脇 一夫 著

萬葉集の解釈と鑑賞 第二卷

A5判 二八〇頁  
定価 各三〇〇円  
以下続刊全六卷

竹内金治郎 正 共編  
大久保 正 共編

新註上代文学選(歌謡篇)

A5判 一六〇頁  
定価 一八〇円

東 寶 書 房

東京都新宿区北山伏町一〇番地  
振替東京一五四九九三番